

□ 書評 □

寺山和雄・広畑和志(監修)

標準整形外科学/第6版

真角昭吾

(大分医科大学)

18年前になるが初版発行のとき本書を入手して、当時、近頃になく特徴をもった教科書が出版されたものだと感じていた。それから3～4年毎に改訂がなされ、今回で5回の改訂である。いま私の手もとには1版より6版までの6冊の本書がある。

私も本や雑誌の編集に携わったことがあり特色を出すのにいろいろと苦労するが、この本の場合、編集の方針やアイディアが非常に卓越しており、編集者や筆者が利用する者の身になって企画、執筆されてきたものと受けとれる。この間、編集者にも執筆者にも世代交代が行われて、常に医学の進歩に応じた新知識を取り込み、ずっと良書の評を得てきたと思う。

私は講義の始めに教科書、参考書を紹介することになっている。どの本と指定するわけではない。よい教科書が数種類出版されているので、学生各人はそれぞれ系統の違った本を購入して見せ合い、講義や実習の不足分を自学自習するよう話している。しかし実際にはほとんどの学生が本書で勉強しているところからみれば、よほど便利で使いやすいいものと思う。

あまりほめてばかりいられないので、本書の次のステップのため、次の衣更えに役立つことを願って、気づいた点を2～3記そう。

本書では損傷や外傷学が別章として取扱われているにも拘わらず、手の外傷や膝の靱帯損傷が外傷各論からはずされ、疾患各論に含まれている。これはやはり

外傷の部にまとめた方がよいと思う。

用語についてはもう少し統一していただきたい。例えば「整形外科学用語集」の上皮小体(副甲状腺)、骨端軟骨板(成長軟骨層)がそれである。また近位—遠位、中枢—末梢、上(端)—下(端)の用語もまちまちのところが見うけられる。

内容については機能解剖が初版からとり上げられているのは疾患の理解に大変役立っているように思う。一方、血液学、生化学、免疫学、関節液など臨床検査に関してはもう少し詳しく解説していただきたいと思う。最後に整形外科領域でも生体材料や人工臓器が急速に進歩しており、ある種の治療はこの知識なしには考えられないものとなっている。本書でもこれに関する器材や治療法は記載されているが、さらに材料学、物理的特性、生体反応・親和性といった基礎的事項の解説がほしい。

本書の対象は医学生ならびに研修医とされていて幅広い。幅広くするには内容を豊富にし、やや専門的なところまで立ち入らねばならない。そのためか学生に必要な基本的な知識、国家試験の出題基準からみると、幾分難しすぎる内容があり、また、執筆者によって難易度にむらがあるようである。一方研修医は専門書やジャーナルで勉強することが多いが、本書もなお手もとに置いてよく利用している。それは和英の索引が他書に比してきわめて豊富であり、そのため「辞典」として便利であるとの使い方を耳にした。

学生の教科書以外に、研修医、指導医の辞典として机上に一冊置いていてよい本と思う。

(B5 頁768 図504 写真873 原色図116 色図34 1996, 定価9,064円(税込) 〒520, 医学書院・刊)